

集中治療医学

科目責任者 長谷川 隆 一（獨協医科大学埼玉医療センター 集中治療科）

I. 前 文

全国的に「集中治療医学」に特化した診療科を標榜する施設は稀であり、集中治療について深く学ぶためには当科での学習は大いに有意義といえます。集中治療科は「臓器横断診療科」とも呼ばれ、特定の臓器や治療法に特化することなく複雑な病態を抱える重症患者の全身を診てバランスを取りながら診療することに主眼をおいた知識と経験を提供しています。またそのような病態に対しては患者のストレスを減らすケアや生命維持をサポートする医療機器、身体機能を維持する理学療法や栄養療法といった多面的なアプローチが必須であり、集中治療室はそのための他職種連携が具現化した部署として運用されています。当科での学習では高度医療を実現するチーム医療のシステムについても学ぶことができます。

II. 受入可能人数

同時に4名まで受け入れ可能。

III. 担当教員

集中治療科 学内教授 長谷川 隆 一
同 学内助教 高 井 千 尋
同 学内助教 内 山 昌 博

IV. 学習内容

第1週 インTRODクシヨン、症例提示、重症患者の病態生理、重症度スコアリング
第2週 循環・呼吸管理
第3週 代謝・内分泌、腎代替療法
第4週 集中治療に関わる職種と専門性、チーム医療とは

座学とペア学習。ペア学習では与えられたテーマについて2人組でプレゼンテーションし、教員からの評価を受ける。

プレゼンテーション作成の過程はメールなどでやり取りしながら教員のサポートを受ける。

座学は教員よりその週のテーマに沿った項目で講義を受講し、その後質疑応答を行う。

V. 学習の到達目標

- ・重症患者の病態評価、生体機能評価の方法と正常値・異常値について論述できる。
- ・評価に応じた治療選択と多面的アプローチの有用性を認識する。
- ・症例を提示し、その背景、病歴、併存症・リスクなどを提示し、臨床的問題を臓器横断的に列挙し対応策をカンファレンスでプレゼンテーションできる。
- ・集中治療室で働く職種の特徴と役割、チーム医療について論述できる。

VI. 成績評価の方法・基準

各回で行われたプレゼンテーションの内容と資料をペアのアウトカムとして評価し、全4回分を総合的に評価して最終評価とします。

VII. 教科書・参考図書・AV資料

- ・受講予定者には生理学・生化学・解剖学に関する要点をまとめた資料を配布します
- ・以後は毎週授業内容を示した資料を毎週配布します。

VIII. 質問への対応方法

メールにて随時対応します。

- ・ 獨協医科大学埼玉医療センター集中治療科 学内教授 長谷川隆一
- ・ Email : r-hase@dokkyomed.ac.jp

IX. 求められる事前学習, 事後学習およびそれに必要な時間 * () 内はそれに必要な時間の目安

事前学習：生理学に関する知識を再確認しておく（生理学のテキストを一読するなど）。（数時間）

事後学習：面接などでフィードバックされた課題を自ら解決するための学習を行う。（数時間）

X. コアカリ記号・番号

「A 医師として求められる基本的な資質・能力」のすべて

「D-1」「D-2」「D-5」「D-6」「D-7」「D-8」「D-12」「D-15」

「F-1-1)」「F-1-5)」「F-1-6)」「F-1-7)」「F-1-8)」「F-1-10)」「F-1-11)」「F-1-15)」「F-1-16)」

「F-1-18)」「F-1-21)」「F-1-26)」「F-1-28)」「F-1-34)」

「F-2-1)」「F-2-2)」「F-2-3)」「F-2-7)」「F-2-8)」「F-2-9)」「F-2-11)」「F-2-13)」「F-2-14)」

「F-3-1)」「F-3-3)」「F-3-4)」「F-3-5)」「F-3-6)」

「G-1-1)」

「G-2-1)」「G-2-5)」「G-2-6)」「G-2-7)」「G-2-8)」「G-2-10)」「G-2-11)」「G-2-15)」「G-2-16)」

「G-2-18)」「G-2-21)」「G-2-26)」「G-2-28)」「G-2-34)」

「G-3-1)」「G-3-2)」「G-3-3)」「G-3-4)」

XI. 課題（試験やレポート）に対するフィードバックの方法

実習中に適宜面接を行い、フィードバックする。

それ以外はメールのやり取りで質問を受付、フィードバックする。

ⅩⅡ. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目の関連

*◎：最も重点を置く DP ○：重点を置く DP

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）		
医学知識	人体の構造と機能，種々の疾患の原因や病態などに関する正しい知識に基づいて臨床推論を行い，他者に説明することができる。	◎
	種々の疾患の診断や治療，予防について原理や特徴を含めて理解し，他者に説明することができる。	○
臨床能力	卒後臨床研修において求められる診療技能を身に付け，正しく実践することができる。	○
	医療安全や感染防止に配慮した診療を実践することができる。	◎
プロフェッショナリズム	医師としての良識と倫理観を身に付け，患者やその家族に対して誠意と思いやりのある医療を実践することができる。	○
	医師としてのコミュニケーション能力と協調性を身に付け，患者やその家族，あるいは他の医療従事者と適切な人間関係を構築することができる。	○
能動的学修能力	医師としての内発的モチベーションに基づいて自己研鑽や生涯学修に努めることができる。	○
	書籍や種々の資料，情報通信技術（ICT）などの利用法を理解し，自らの学修に活用することができる。	○
リサーチ・マインド	最新の医学情報や医療技術に関心を持ち，専門的議論に参加することができる。	○
	自らも医学や医療の進歩に寄与しようとする意欲を持ち，実践することができる。	○
社会的視野	保健医療行政の動向や医師に対する社会ニーズを理解し，自らの行動に反映させることができる。	
	医学や医療をグローバルな視点で捉える国際性を身に付け，自らの行動に反映させることができる。	
人間性	医師に求められる幅広い教養を身に付け，他者との関係においてそれを活かすことができる。	◎
	多様な価値観に対応できる豊かな人間性を身に付け，他者との関係においてそれを活かすことができる。	◎